

新潟産業大学人文学部紀要 第8号 1998

ジョン・フィリップスの『林檎酒』

十八世紀英国における農耕詩の系譜（1）

海老澤 豊

十八世紀英詩の特徴の一つとして、多種多様な様式が発展したことが挙げられる。一例を挙げれば、抒情詩の分野では、パストラルの変貌、オードの隆盛、バラッドの再発見、ソネットの復興など、今日存在する様式や形式の大部分は、十八世紀の詩人たちによって完成されたと言ってもよい。しかし十八世紀の詩歌で何よりも注目すべきは、古代ローマの詩人ウェルギリウス (Publius Vergilius Maro, 70-19 B.C.) の『農耕詩』 (*Georgica*, 29 B.C.) を原型とする一連の長編詩であろう。『農耕詩』とは文字通り農耕に関する主題を幅広く取り扱って、これを教訓的ならびに描写的に描いた、4巻からなる作品である。その具体的な内容を示すために、当時の決定訳とされたドライデン (John Dryden, 1631-1700) の英訳を借りて、第1巻の冒頭を引用する。⁽¹⁾

What makes a plenteous Harvest, when to turn
The fruitful Soil, and when to sow the Corn;
The Care of Sheep, of Oxen, and of Kine;
And how to raise on Elms the teeming Vine:
The Birth and Genius of the frugal Bee,
I sing, Mecaenas, and I sing to thee. (I. 1-5)

いかに収穫を実りあるものとするか、いつ肥沃な
土をすき返すべきか、いつ小麦の種を撒くべきか、
羊や、雄牛や、雌牛の世話をいかにすべきか、
いかに多産な葡萄を榆の木に絡ませて育てるか、
倹約家の蜜蜂の誕生ならびに特質について、
私は歌う、マエケーナスよ、あなたに歌う。

ウェルギリウスが今日の眼からすれば特異とも思える作品を生み出したのは、ヘシオドスらの先例はあるけれども、ローマ内乱後に荒廃した国土を復興する一助として、農業、牧畜、果樹栽培、養蜂などに関係する実践的な知識を読者に伝えるとともに、久しく続いた戦乱で喪失感に襲われていたローマ市民を鼓舞し、国威を発揚するためであった。英国においてウェルギリウスは古くから知られていたが、それはもっぱら叙事詩『アエネイス』(Aeneis, 19 B.C.) によるところが多く、『農耕詩』が一般に膾炙するようになったのは1697年に発表されたドライデンの英訳以降のことである。ドライデンの翻訳は正確な逐語訳というよりも、ウェルギリウスの精神を伝えながらも、かなり自由に英国化(英語化)を試みた農耕詩の雛型と見たほうがよく、原詩が2188行しかないのに対して訳詩は3149行に及んでいる。しかしこの翻訳が後の英国の詩人たちに与えた影響は、いくら強調しても足りるものではなく、ドライデンに倣って英国化された農耕詩が次々と生み出されることになった。

チョーカーは十八世紀の英国において『農耕詩』がもてはやされた理由として次の二点を挙げている。一つは帝政確立当時のローマと十八世紀初頭のイングランドの政治的情况が似通っていたこと、つまり清教徒革命、チャールズ一世の処刑、王政復古と続き、1688年の名誉革命によって一応の終止符を打つことになった国内の混乱を体験してきた英国人にとって、永続性と繁栄を歌い上げたウェルギリウスの理想は本能的に共感を感じるものであった。もう一つは当時の人々は文明化の不安定さに気づき始めていたために、自らの労働によって世界を維持しようと試みる『農耕詩』の世界に一種の規範を読み取ったことである。⁽²⁾ またチョーカーは農耕詩という様式が十八世紀の詩人たちに強く訴えた理由は、『農耕詩』が「意義深く有益だと思われた人生観を提出していた」ためであり、詩人たちは「この形式によって、実に様々な経験に対する解釈に達することができた」からだと述べている。⁽³⁾ ドゥーディはチョーカーの意見をほぼ是認しながらも、『農耕詩』が読者の対象として設定したのは、少なからぬ教養と閑暇を持っている自作農、つまり英国人が理想とするカントリー・ジェントルマンであり、そのために『農耕詩』は英国の読者に魅力的に映ったのだと、少々穿った説を付け加えている。さらにドゥーディは農耕詩という様式が、詩人自らの作り出す規則以外には何の制約もない「自由な形式」であって、十八世紀の詩人たちは農耕詩の多様性と汲めども尽きぬ豊かさに価値を見つけたと説いている。⁽⁴⁾ またグッドリッジによれば、十八世紀に農耕詩を書いた詩人たちは、ミルトン(John Milton, 1608-74)の二通りの作品、つまりラテン語の影響の強い叙事詩『失樂園』(Paradise Lost, 1674)と、より英語的な文体で書かれた姉妹編をなす牧歌「快活の人」(“L'Allegro”, 1645)「沈思の人」(“Il Penseroso”, 1645)双方

を模範としながら、自らの文体を練り上げていったために、英国の農耕詩には叙事詩と牧歌両方の特徴が含まれているという。⁽⁵⁾

このように農耕詩というジャンルは、もともと農事に関わる対象を描くジャンルとして出発し、十八世紀英国の読者に広く受け入れられるようになったが、その形式の自由さと大きな包容力のおかげで、詩人たちは次第にその主題を拡大していき、農業とは本来何の関わりもない様々な人間の体験を農耕詩という様式で描いていくようになる。例えば広く農業に関わる主題を描いたものとしては、まずフィリップス (John Philips, 1676-1708) の『林檎酒』(*Cider*, 1708)、スマート (Christopher Smart, 1722-71) の『ホップ農園』(*The Hop Garden*, 1744)、グレインジャー (James Grainger, 1721-66) の『砂糖黍』(*The Sugar Cane*, 1764) などがあり、隣接した主題としてダイヤー (John Dyer, 1699-1758) の『羊毛』(*The Fleece*, 1757) や、メイソン (William Mason, 1724-97) の『英国の庭園』(*The English Garden*, 1772-81) などが挙げられよう。さらに山野における狩猟を題材としたポーブ (Alexander Pope, 1688-1744) の『ウィンザーの森』(*Windsor Forest*, 1713) や、ゲイ (John Gay, 1685-1732) の『田園の狩り』(*Rural Sports*, 1713) や、サマヴィル (William Somerville, 1675-1742) の『狩猟』(*The Chase*, 1735) がある。この辺りまではウェルギリウスの『農耕詩』に描かれた世界の一部を取捨選択したものだと思われるが、アームストロング (John Armstrong, 1709-79) の『健康維持法』(*The Art of Preserving Health*, 1744) や、ロンドンの街路の歩き方を伝授する『トリヴィア』(*Trivia, or the Art of Walking of the Streets of London*, 1716) に至ると、農耕詩という名称が妥当かという印象さえ与えるかもしれない。しかしアームストロングにせよ、ゲイにせよ、自分は農耕詩を書いているのだという意識を強く持っており、言うなれば農耕詩という様式が英国において変貌を遂げたと考えべきなのであろう。やがてこの変化の波は、クーパー (William Cowper, 1731-1800) の『課題』(*The Task*, 1785) などを経て、ロマン派の詩人ワーズワース (William Wordsworth, 1770-1850) の『序曲』(*The Prelude*, 1850) へと引き継がれていくことになる。

本論は十八世紀英国において農耕詩がいかに変貌していったかを辿る長大な論考の一部である。ここではまずドライデンの英訳の序文として掲げられた、英国の農耕詩の性質を位置付けたアディソン (Joseph Addison, 1672-1719) の「農耕詩に関するエッセイ」(“An Essay on the Georgics”, 1693) を吟味した後に、英国における初の本格的な農耕詩だとされるフィリップスの『林檎酒』を取り上げて、その特徴と意義を明らかにする。⁽⁶⁾

(1) アディソンの「農耕詩に関するエッセイ」

ドライデンが1697年に『農耕詩』のかなり自由な英訳を発表したことを契機に、英国の詩人たちが競うようにその模倣作を生み出していったことは既に述べたが、ドライデンが自らの翻訳に付した序文は、パトロンのチェスターフィールド伯爵に対する大げさな賛美ばかりが目につき、「最高の詩人の最高の作品」という空疎な評があるだけで、農耕詩の本質について語っている箇所は殆どないと言ってよい。⁽⁷⁾ だがアディソンが先輩詩人の英訳に寄せた「農耕詩に関するエッセイ」は、後にジョンソン博士 (Dr. Samuel Johnson, 1709-84) が『英国詩人伝』 (*Lives of the English Poets*, 1779-81) で「幼稚で表面的、得るところがない、学者の学識もなければ批評家の眼識もない」と酷評しているが、⁽⁸⁾ 今なお注目に値する内容を持っていると思われる。もともとアディソンは「エッセイ」を書く以前に『農耕詩』第4巻の一部を英訳するなど、このウェルギリウスの作品に対して並々ならぬ関心を寄せていた。当時まだ無名であったアディソンにとって、文壇の大御所ドライデンの翻訳（それも『農耕詩』の）に序文を寄せる機会を与えられたことは、将来への大きな足掛かりになると思われたに相違ない。アディソンは「この詩の中に疵があると信じるくらいなら、自分の判断力を疑う」と述べるなど『農耕詩』を盲目的に賛美していると感じられるふしもあるが、ウェルギリウスの文体から『農耕詩』の本質に至るまでの確な指摘をしていると思われるし、このエッセイが後の詩人たちに与えた影響は決して見逃すことができない。

アディソンは『農耕詩』で用いられた文体から論を始めている。ウェルギリウスは古代ギリシアの詩人に倣い、三種類の新しい詩歌をローマに紹介したが、英雄詩 (“*Heroicks*”) の荘厳さ (“*Majesty*”) はドーリア地方の方言で書かれたホメロスの叙事詩が最高であり、また牧歌 (“*Pastoral*”) の甘美さ (“*Sweetness*”) と質朴さ (“*Rusticity*”) は、イオニア地方の方言で書かれたテオクリトスの牧歌が秀逸である。ところがその中間の文体 (“*the middle Stile*”) で書かれたウェルギリウスの『農耕詩』は、先達のヘシオドスをはるかに凌いでいるとアディソンは言う。つまり農耕詩という様式は、叙事詩の荘厳さと牧歌の質朴さをともに備えているというわけである。主に十七世紀英国の農耕詩について論じたロウは、「農耕詩とは辛苦や困難さに対して、力強く辛抱強い労働の価値を強調する様式であり、安らぎの代わりに仕事を強調するがゆえに牧歌とは異なり、殺戮や破壊の代わりに植樹や建築を強調するがゆえに叙事詩とは異なる」という。⁽⁹⁾ 確かに農耕詩はもともと牧歌や叙事詩とは根本的に性質の異なる様式である。ただし激しい労働の合間には木々を愛で、川のせせらぎに耳を澄まし、はるかな山の頂を眺めて幸福観を味

わうという一種の牧歌的な要素もあるだろう。また叙事詩は何も戦争だけを中心に描いている訳ではなく、国家の建設並びに発展という大命題があることを忘れてはならない。そもそもウェルギリウスが『農耕詩』を書き始めた理由の一つに、ローマ帝国発展への願いがあったことは明らかであり、そのような意味で農耕詩が叙事詩や牧歌と共通点を備えていることは否定できないと思われる。さらにアディソンがここで語っているのは、叙事詩の荘厳さと牧歌の質朴さという文体についてであるが、この二つの概念は崇高 (Sublime) 及び簡素 (Simplicity) と言い換えることができる。これらはいずれも十八世紀の詩歌において理想とされたものであり、その双方を合わせ持っているということは、農耕詩という様式に内包された大きな可能性を意味する。

次にアディソンは農耕詩の定義を明らかにしている。農耕詩とは農事に関する教訓や実践的な知識を読者に対して与えることを大きな目的とする様式であるが、二点において他の様式とは異なると言う。まず農耕詩の語り手は様々な詩的効果に熟知した詩人であるべきで、牧歌に登場する質朴な羊飼いはありえない。また農耕詩が教訓を与える様式であるとは言っても、倫理的な義務や自然哲学に関する教訓を説く様式とは区別されるべきだとアディソンは言う。何故なら農耕詩で開陳される教訓は、無味乾燥な抽象の羅列ではなく、想像力に訴えかけるように装飾を施さなければならないからである。アディソンの農耕詩の定義は「快い衣裳をまとい、詩歌のあらゆる美と装飾で飾り付けられた、農事の知識の一部」というものであり、従って農耕詩の教訓は「有益であると同時に可能な限り装飾的」にすべきだと説かれる。これは言い換えれば、農耕詩は古来考えられてきた詩歌の二つの役割、つまり「教え諭すこと」と「愉しませること」を兼ね備えた様式であるということだろう。但しアディソンは全体を通じて、有益さよりも装飾に重点を置く傾向が強く、無味乾燥な教訓も装飾を加えて想像力に訴えるように変形すれば、それはすなわち詩歌となるという彼の考え方、或いは十八世紀的な考え方が根底にあると思われる。

続いてアディソンは農耕詩の書き方の技術面について、少なからぬ要点を挙げている。(1) 前記のような有益で装飾的な教訓を複数選り抜いたら「自然な力任せではない方法」によって、繋ぎ目が分からないように結びつけるべし。(2) 教訓は最も快く好ましい描写のしかたをすべし、これが詩歌と散文の主な相違点である。(3) 教訓は生のまま提出するのではなく、詩の登場人物の行動を通して示すべし。(4) 全ての真理を並び立てるのではなく、一部を示して全体を想像させるべし。(5) 教訓ばかりでは読者が飽きてしまうので美しく気晴らしになるような、しかも本筋と全く無関係ではない脱線をすべし。こうしてアディソンはウェルギリウスの原典を基準にしながら、農耕詩に必要とされる

様々な留意点を説いていくのだが、ここで注目すべきは最後の「脱線」(“digression”)に関するものであろう。農耕詩で説かれる教訓とは、土壌の選び方、種子の撒き方、収穫の方法など、具体的・実践的な知識を与えることに他ならず、いくら詩的装飾を加えたからとはいえ、このような教示を羅列していただけでは、農業に関する技術的な手引書と変わらない。そこでアディソンの言う「脱線」が必要になってくるのである。例えば英国の詩人たちによる農耕詩によく見られる脱線としては、土地の特産物を歌った後に、当地の歴史や風習について蘊蓄を傾ける、耕作技術を伝授した後で、農具の発展に関する知識を披露する、また異国の自然描写を延々と続けたり、農夫と娘のロマンスを物語風に語るなどのものがある。実はこのような脱線こそが、英国の農耕詩の発展に大きく寄与している要素なのである。先に指摘した詩歌の二つの役割「教え諭すこと」「愉しませること」に当てはめてみると、脱線は明らかに後者に属している。そもそも十八世紀初頭において農耕詩の読者として想定される層は、実際に耕作を行なう農夫であるとは思われず、ドゥーディも指摘していたように、ある程度の閑暇と知識と財政的基盤を兼ね備えた有産階級である。彼らは確かに自らと無縁の農事に関する知識に愉しみを見い出すこともあるかもしれないが、地方の風土や異国情緒やラヴロマンスといった脱線にむしろ大きな喜びを感じると考えるのが自然であろう。また詩人の立場から言っても、この脱線をいかに巧みに取り入れるかという点が、独創性を発揮すべき腕の見せ所になるわけで、その意味でも脱線は農耕詩において欠かすことのできない重要な要素なのである。

次にアディソンは再び農耕詩の文体や表現について論じている。アディソンは日常語は表現の荘厳さを奪ってしまうので、真面目な詩歌に入れるべきではないという立場から、ウェルギリウスの文体には隠喩やギリシア語法や婉曲語法などがふんだんに含まれていることを指摘して、『農耕詩』が全編を通して「壮麗な音楽性と威厳ある言葉」を維持していると言う。このような表現や言語の荘厳さは、もともと叙事詩に特有の要素であるが、アディソンの言う「装飾」との関係はどのようなになっているか。アディソンはヘシオドスとウェルギリウスを比較し、前者の「描写は自然に満ち溢れているが、その自然は簡素で飾り気がない」と述べる一方で、後者は「主題が本来持っている粗さや簡素さを、表現の暗示性、詩行の壮麗さ、移行の多様性、省察における厳かな雰囲気が高めている」と断言している。つまりアディソンにとって「装飾」とは、本質的に野卑なもの、或いはあるがままの対象を、日常語とは掛け離れた表現で描写することによって、これを崇高なものに変えることを意味すると考えてよいだろう。言い換えるならば、農事を描くことを主題とする農耕詩を叙事詩と同じ高みにまで到達させる手段が、

アディソンの「装飾」なのだ。悪名高い「優雅な雰囲気湛えながら、土塊を砕き、糞を撒く」という一文も、こうしたアディソンの意識を表わしていると言えよう。だがこれは卑近な対象を高雅な文体で描くという「擬似英雄体」(Mock-Heroic) すなわちパロディやもじりにも通じる、ある意味では危険な手段である。アディソンもこの危険には気づいていたようだが、彼はあくまでもウェルギリウスを神聖視することにこだわるために、養蜂を主題とした『農耕詩』第四巻に触れて、「取るに足らない蜜蜂の行動を人間の最も重要な関心事から引き出した比喻で高める」或いは「蜜蜂の擬似的な崇高さを実に見事な優雅さで描いている」と言い切り、パロディの可能性をすっかり否定してしまう。しかし後の詩人たち、特にゲイの農耕詩は最初から内容と表現のずれから生まれるおかしさを目指しており、農耕詩の変貌に大きく関わることになるが、それについては既に別の所で論じたので、ここでは控えたい。⁽¹⁰⁾ 要約すればアディソンはウェルギリウスを神聖視するがゆえに、原典の『農耕詩』から全ての規範を抽出したが、特に「装飾」や「脱線」という要素を強調することによって、後の詩人たちが英国風の農耕詩を生み出す可能性を引き出した。アディソンはあくまでも農耕詩が叙事詩と比肩されるべき高尚な様式であると考え、パロディ的な要素をできる限り排除した。その意味ではアディソンの「エッセイ」はウェルギリウスを解説するだけに止まっていると言えるが、後に農耕詩が、パロディを含めて、様々な変貌を遂げるとはアディソンにも予測できなかったのであろう。ただし農耕詩という様式を英詩に移植したのがドライデンの功績であったとすれば、アディソンは農耕詩の理論的な基盤を確立し、はからずも英国における農耕詩の発展を促したという点で無視できない存在なのである。

(2) フィリップスの『林檎酒』

ジョン・フィリップス (John Philips, 1676-1708) は英国において農耕詩の様式を確立した最初の詩人であると同時に、初期のミルトンのパロディストとして認められてきた。処女作「光り輝くシリング銀貨」(“The Splendid Shilling”, 1705) は、借金取りの影に怯える責務者の情けない語りを、荘厳なミルトン風の文体と表現で描いた作品であり、内容と形式の不一致によって新たな効果を生み出している。フィリップスは続くマールバラ公爵の武勲を讃える「ブレニム」(“Blenheim”, 1705) や、バックスとケレスが葡萄酒とビールの優越を競う「シリアリア」(“Cerealia”, 1706) でも同様の作風を見せている。このようなミルトンの模倣は、パロディの要素こそ薄まるけれども、これから論じるフィリップスの代表作『林檎酒』(Cider, 1708) において頂点に達する。⁽¹¹⁾

What Soil the Apple loves, what Care is due
To Orchards, timeliest when to press the Fruits,
Thy Gift, *Pomona*, in *Miltonian* Verse
Adventurous I presume to sing; of Verse
Nor skill'd nor studious: But my Native Soil
Invites me, and the Theme as yet unsung.
Ye *Ariconian* Knights, and fairest Dames,
To whom propitious Heav'n these Blessings grants,
Attend my Layes; nor hence disdain to learn,
How Nature's Gifts may be improv'd by Art. (I, 1-10)

どんな土壌を林檎が好み、どんな世話が適するか、
ポーモーナよ、汝の贈り物である果実を何時絞れば
最適なのかを、果樹園主に、ミルトン風の
韻律で大胆にも私は歌おうとする、その韻文は
巧みでも注意深くもない。だが生まれ故郷の土壌が、
未だ歌われたことのない主題が、私を誘うのだ。

汝らアリコニウムの騎士と麗しき貴婦人たちよ、
汝らに好意ある天がこれらの恵み物を授けるのだが、
我が歌に耳を貸せ！この先も侮蔑することなく、
自然の贈り物が技術によって改良される様を知れ。

ポーモーナとはローマ神話において果実を司る女神のことであり、ロイドの註によれば、アリコニウム (*Ariconium*) とはウェールズとイングランドの国境に近いロス・オン・ワイ (*Ross-on-Wye*) 付近にあった、4 世紀前半頃に鉄の精錬で栄えた町である。⁽¹²⁾さらにはこの地域はフィリップスの祖父が教区牧師を務め、フィリップス自身もそこに葬られた、大寺院のある町ヘリフォード (*Hereford*) とも近接していることを付け加えておこう。この冒頭に明らかにされているように、この詩におけるフィリップスの意図は、故郷を舞台として、その地方の名産である林檎の栽培に関する技術を、ミルトンが『失樂園』を書いた形式すなわち弱強五歩格で無韻のブランク・ヴァースを用いて、果樹園主に伝

授することに他ならない。またフィリップスはこの詩のエピグラフとしてウェルギリウスの『牧歌』(*Eclogues*, 37.B.C.) 第二巻から「この果実もまた名誉にあずかるであろう」という一節を選び、さらには詩の中でも農耕詩の創始者であるウェルギリウスに対する敬意を忘れることなく記している。

Thus sacred *Virgil* liv'd, from courtly Vice,
And Baits of pompous *Rome* secure; at Court
Still thoughtful of the rural honest Life.
And how t'improve his Grounds, and how himself:
Best Poet! fit Exemplar for the Tribe
Of *Phæbus*, --- (l. 773-7)

かく聖なるウェルギリウスは暮らし、宮廷の悪徳や
壮麗なローマの誘惑から身を退け、宮廷にあっても
常に田園における正直な生活を思っていたのだ。
土地を改良し、自らを高める方法を思案していたのだ。
最上の詩人よ！アポロの種族にとっての
最上の模範だ、---

ディーンは『林檎酒』が最も早いミルトンの模倣作として、英国の最初の農耕詩として、教訓的・商業的な長編詩の先駆として、歴史的な重要性を持っていることは否定できないと言う。⁽¹³⁾ またグリフィンも『林檎酒』がフィリップスの作品の中で最もミルトン的であると同時にウェルギリウスの詩であると要約する。⁽¹⁴⁾ しかし小論においては農耕詩としての『林檎酒』に焦点を当てて論じていきたいと思う。最初に農耕詩の特徴の一つである実践的な知識の伝授について考えてみよう。

フィリップスはウィンチェスター校からオックスフォードのクライスト・チャーチ学寮に進んだ知識人であり、ジョンソン博士の伝えるところによれば、庭園家であり植物学者であったフィリップ・ミラーがこの詩を読んで、「全ての教示は正しいものであり、教授を目的として書かれた書物よりもはるかにましだ。だがフィリップスは一度たりとて林檎酒を作った経験はなかった」と語ったという。⁽¹⁵⁾ 事実フィリップスの伝授する知識は、栽培地の地形や土壌の見分け方に始まり、作物同士の相性、接木の方法、害虫の駆除法、林檎酒の製造法など延々と続くが、全般的に具体性が強く、微に入り細に入るような類のものである。

--- The *Herefordian* Plant

Caresses freely the contiguous *Peach*,
Hazel, and weight-resisting *Palm*, and likes
T'approach the *Quince*, and th'*Elder's* pithy Stem;
Uneasie, seated by funeral *Yeugh*,
Or *Walnut*, (whose malignant Touch impaires
All generous Fruits), or near the bitter Dews
Of Cherries. --- (I. 263-70)

--- ヘリフォードの作物は

隣接するモモやハシバミ、重みに耐える
シュロをなれなれしく抱き締めたり、マルメロや
ニワトコの髓のある茎には好んで近付いたりするが、
墓地によく植わっているイチイや、
胡桃（その悪意ある接触は全ての豊かな果実を
損なうのだ）の脇や、桜の苦々しい露の近くでは
居心地が悪いのだ。---

ここで「ヘリフォードの作物」と歌われる林檎が収穫された後は、いよいよ林檎酒造りの準備をしなければならない。

--- Now prepare

Materials for thy Mill, a sturdy Post
Cylindric, to support the Grinder's Weight
Excessive, and a flexile Sallow's entrench'd,
Rounding, capacious of the juicy Hord.
Nor must thou not be mindful of thy Press
Long e'er the Vintage; but with timely Care
Shave the Goat's shaggy Beard, least thou too late,
In vain should'st seek a Strainer, to dispart
The husky, terrene Dregs, from purer Must. (II. 81-90)

--- いざ搾液機を

作るための材料を準備すべし、シリンダー状の
どっしりとした柱は、過剰なまでに重い挽臼の
支えとなり、また深い溝を穿った柔軟な柳の木は、
果汁を十分に貯えて、丸々と膨張しよう。
収穫を迎える遙か前から、汝の圧縮機に対する
注意をおさおさ怠るなかれ、時宜良く心掛けて、
山羊の毛むくじゃらの顎髭を剃り、後手後手に回って、
漉すものを虚しく探し求めることのないように、
皮や土のついた澱と純粋な果汁液を分離すべし。

こうした至れり尽くせりの教示は農耕詩に不可欠な要素であるのだが、この詩の真の読者として考えられるのは、林檎酒造りに従事する農夫たちではなく、林檎酒を消費するだけの有閑階級に他ならない。従ってフィリップスの様々な教示は、細々とした有益さを備えているにもかかわらず、農夫の必要性よりはむしろ有産階級の知的好奇心を満たす結果になってしまう。言い換えるならば、この『林檎酒』という農耕詩は、農作業のためのガイドブックという体裁を取っているけれども、現実には未知の分野を紹介する楽しい読み物として存在するのである。こうした観点からすれば、この詩において林檎の栽培や林檎酒の製造について語られる箇所が実際は全体の半分ほどの分量しかないことも納得できる。残りの半分はこの詩の舞台、かつてのアリコニウム、現在のヘリフォードにまつわる様々な伝説や挿話、諸外国に対して英国の優位を歌う讃歌に充てられている。

政治的あるいは愛国的な要素も、農耕詩に欠かせない要素であることは既に述べたが、この『林檎酒』においては地方性や郷土意識、もっと簡潔に言えば「お国自慢」が著しく強い。フィリップスの郷土愛は、かつてアリコニウムが大地震によって崩壊したという伝説に言及しながらも、現在のヘリフォードの林檎酒こそが最高であると断言し、各国の有名な葡萄酒の産地をものともせずこう歌う。

What shou'd we wish for more? or why, in quest
Of Foreign Vintage, inscere, and mixt,
Traverse th'extremest World? Why tempt the Rage
Of the rough Ocean? when our native Glebe

Imparts, from bounteous Womb, annual Recruits
Of Wine delectable, that far surmounts
Gallic, or *Latin* Grapes, or those that see
The setting Sun near *Calpe's* tow'ring Height.
Nor let the *Rhodian*, nor the *Lesbian* Vines
Vaunt their rich Must, nor let *Tokay* contend
For Sov'ranty; *Phanæus* self must bow
To th'*Ariconian* Vales: --- (I. 530-41)

これ以上何を望もうとするのか？あるいは何故
不純で、混ぜ物の、外国の葡萄酒を求め、
最果ての国を横断するのか？何故荒々しい大洋の
猛威に挑もうとするか？我々の故郷の大地が
恵み深い子宮から、毎年新たな美味なる果実酒を
分け与えてくれ、それはフランスやイタリアの
葡萄や、カルプの聳え立つ高处の近くで沈み行く
太陽を眺める葡萄を遥かに凌いでいるというのに。
ロードス島やレスビア島の葡萄に、豊かな果汁を
自慢させてはならぬ、トカイに至高を競わせるな。
ファナウス自身もアリコニウムの谷間に
頭を垂れるに違いない。---

フィリップスのこのような郷土に対する誇りは、君主制に対する共感と交じり合っ
て、清教徒革命におけるチャールズ2世の斬首に対する非難となって表われる。

Yet was the Cyder-Land unstain'd with Guilt;
The Cyder-Land, obsequious still to the Thrones,
Abhor'd such base, disloyal Deeds, and all
Her pruning-hooks extended into Swords,
Undaunted, to assert the trampled Rights
Of Monarchy; but, ah! successful She
However faithful! --- (II. 514-20)

だが林檎酒の国は罪に手を染めることはなかった、
林檎酒の国は、常に歴代の王座に対して忠誠を誓い、
かような卑劣な、不実なる行為を忌み嫌い、その
枝を刈り込む鎌は残らず伸びて刀剣となり、
怖じけることなく、蹂躪された君主制の権利を
擁護した、だが、ああ！忠実ではあったが
不首尾に終わった！ ---

まだ記憶に新しい過去の内乱にまつわるこのフィリップスの語りは、やはり内乱によって崩壊した共和制ローマを嘆くウェルギリウスの語りと重なり合う。また古代ローマが皇帝アウグストゥスの即位によって再統一され、かつての栄光と繁栄を取り戻した経緯を再び辿るかのように、フィリップスは女王アンによって英国が過去の騒乱を最終的に収拾し、ジェイムズ1世を受けてスコットランドを完全に併合し、諸外国に脅威を感じさせるまでに復興した歴史をかなりの長さにわたって描いている。

--- 'till prudent A N N A said

LET THERE BE U N I O N; strait with Reverence due
To Her Command, they willingly unite,
One in Affection, Laws, and Government,
Indissolubly firm; from *Dubris* South,
To Northern *Orcades*, Her long Domain (II. 639-44)

--- ついに慎重なるアンが言った

「合併よ、あれかし」ただちに正当なる敬意をもって
彼女の命令に従い、両国は進んで合併し、
愛情と、法律と、政府が、分かち難く
一つになった、南はデュブリスから北は
オーケイズまで、彼女の長い領土となった。

「合併よ、あれかし」という一節は言うまでもなく創世記における神の言葉のもじりで、ここにアンは絶対的な権力者にして平和を招来する君主の象徴となり、女王によっ

でもたらされた和平は「林檎酒の国」の繁栄につながっていく。逆に言うならば、フィリップスの描く牧歌的な果樹園は、英国の平和や安定を抜きにしては成立しえないのである。ここに農耕詩の持つ政治的・愛国的な側面が明白に示される。歴史的に見れば、英国における農耕詩の確立は、英国の政治的・経済的な発展、ひいては帝国主義・植民地主義の萌芽と軌を一にするのである。これはフィリップスが王党派びいきであったことと無関係ではないと考えられる。

--- where-ev'r *British* spread

Triumphant Banners, or their Fame has reach'd,
Diffusive, to the utmost Bounds of this
Wide Universe, *Silurian* Cyder borne
Shall please all Tasts, and triumph o'er the Vine. (II. 665-9)

--- 何処で英国人が勝利の御旗を

翻そうと、またその名声が広まって、この広大なる
世界の最も遠い領域まで達したとしても
シルリアの地で生み出された林檎酒は
万人の味覚を満足させ、葡萄酒に対して勝ち誇るだろう。

シルリアとはかつてウェールズ南東部にあった国を指し、アリコニウムやヘリフォードと同一視されている。英国が武力で諸外国を制圧するのと同じように、フィリップスの故郷の林檎酒は葡萄酒に優ってあらゆる民族の感覚を愉しませる。これは言い換えれば味覚による世界制覇に他ならない。

かくしてフィリップスの『林檎酒』は、ブランク・ヴァースを詩型として選んだことによって、脚韻に何ら縛られることのない柔軟性を獲得し、また原典となるウェルギリウスの『農耕詩』を英国風に消化する手本を提示し、そして農作業の喜びや故郷に対する愛着を英国の膨張主義と結びつけることによって、本来農耕詩が持つ政治的な側面を取り込むのに成功した。後の詩人たちによる農耕詩のほとんど全てが、この『林檎酒』の影響下にあると言っても過言ではない。フィリップスの『林檎酒』は、まさに英国における農耕詩の指針となるべき模範を示しているのである。

— 注 —

- (1) *The Poems of John Dryden*, ed. James Kinsley, 4 vols (Oxford: Clarendon Press, 1958) 2: 918. 本論におけるウェルギリウスの『農耕詩』は全てこのドライデンの英訳による。
- (2) John Chalker, *The English Georgic: A study in the development of a form* (London: Routledge & Kegan Paul, 1969) 10-14.
- (3) Chalker, 2.
- (4) Margaret Anne Doody, *The Daring Muse: Augustan Poetry Reconsidered* (Cambridge: Cambridge University Press, 1985) 109-18.
- (5) John Goodridge, *Rural Life in Eighteenth-Century English Poetry* (Cambridge: Cambridge University Press, 1995) 4.
- (6) Joseph Addison, "An Essay on the Georgics," in *The Works of John Dryden, vol. V, The Works of Virgil in English* (University of California Press: Berkeley, 1987) 145-53.
- (7) *The Poems of John Dryden*, 2: 913.
- (8) Samuel Johnson, *Lives of the English Poets*, ed. George Birkbeck Hill, 3 vols (1905; Hildesheim: Georg Olms Verlagsbuchhandlung, 1968) 2: 83.
- (9) Anthony Low, *The Georgic Revolution* (Princeton: Princeton University Press, 1985) 12.
- (10) 拙論「ロンドンの街路を安全に歩く方法～ジョン・ゲイの『トリヴィア』～」『彷徨の詩学～十八世紀イギリス詩からヒーニーへ～』所収（金星堂、1997）1-26.
- (11) *The Poems of John Philips*, ed. M. G. Lloyd (Oxford: Basil Blackwell, 1927) 本論におけるフィリップスの詩の引用は全てこの版による。
- (12) *The Poems of John Philips*, 97.
- (13) C. V. Deane, *Aspects of Eighteenth Century Nature Poetry* (Oxford: Basil Blackwell, 1935) 129.
- (14) Dustin Griffin, *Regaining Paradise: Milton and the eighteenth century* (Cambridge: Cambridge University Press, 1986) 116.
- (15) James Boswell, *The Journal of a Tour to the Hebrides*, ed. Peter Levi (Harmondsworth: Penguin, 1984) 19.